９　「」建礼門院右京大夫　─中世の私家集・日記

16年度　広島修道大学

★　次の文章を読み、設問に答えよ。

　　「建礼門院右京大夫集」の作者右京大夫は、かつて高倉天皇の中宮徳子の女房として仕え、その日々の中で平家一門の栄華と崩壊を目のあたりにした。一度、宮仕えを退いた彼女は、恋人であった平資盛が一門の人々とともに壇ノ浦で入水したことを知らされ、悲しみのうちに日を過ごしていた。以下の文章は、そうした彼女が再び宮仕えをすることを述べている箇所である。

　若かりしほどより、身を①ようなきものに思ひとりにしかば、ただ②心よりほかの命のあらるるだにもはしきに、まして人に知ら１るべきことは、かけても思はざりしを、さるべき人々、ａさりがたく言ひはからふことありて、思ひのほかに、年経てのち、また九重の中を見し身の契り、かへすがへすさだめなく、我が心のうちも③すぞろはし。藤壺の方ざまなど見るにも、昔住みなれしことのみ思ひ出で２られてかなしきに、御しつらひも世のけしきも、かはりたることなきに、ただ我が心のうちばかりくだけまさるかなしさ。月のくまなきをながめて、おぼえぬこともなくｂかきくらさるる。昔軽らかなる上人などにて見し人々、重々しきにてあるも、④「とぞあらまし、かくぞあらまし」など思ひ続けられて、ｃありしよりもけに、心のうちはｄやらむかたなくかなしきこと、何にかは似む。高倉の院の御けしきに、いとよう似⑤まゐらせさせ⑥おはしましたる、御さまにも、数ならぬ心の中ひとつにたへがたく、来し方恋しくて、月を見て、

　　今はただしひて忘るるいにしへを思ひいでよとすめ３る月影

（注）　上　後鳥羽天皇

問１　傍線部①「ようなき」と同じような意味のことばを本文中から四字で抜き出せ。

［　　　　　　　　　］

問２　傍線部②「心よりほかの命のあらるる」の現代語訳として、最も適切なものを次の選択肢の中から一つ選べ。

⑴　心からほかの生き方もあると思える

⑵　本当にほかの命を生きてみたい

⑶　心ならずも別の命に心がひかれる

⑷　自分の思いにそぐわない命がある

⑸　生きていたくもない命を長らえている

問３　傍線部③「すぞろはし」は「すずろはし」と同じ意味をもつ。このことばの現代語訳として、最も適切なものを次の選択肢の中から一つ選べ。

⑴　なんとなく心が沈んでくる　　⑵　なんとなく心が落ち着かない

⑶　なんとなくあせっている　　　⑷　なんとなくいやな感じである

⑸　なんとなく疎んじられている

問４　傍線部④「『とぞあらまし、かくぞあらまし』など思ひ続けられて」とは、誰のことについてなのか。最も適切なものを次の選択肢の中から一つ選べ。

⑴　徳子　　⑵　資盛　　⑶　高倉の院　　⑷　上　　⑸　右京大夫

問５　傍線部⑤「まゐらせさせ」、傍線部⑥「おはしまし」は、それぞれ誰に対しての敬語表現なのか。最も適切なものを次の選択肢の中から一つ選べ。

⑴　徳子　　⑵　資盛　　⑶　高倉の院　　⑷　上　　⑸　右京大夫

⑤＝［　　　］　　⑥＝［　　　］

◎問６　和歌にこめられた思いに最もよく対応しているところを本文中より二十字以上～三十字以内で探し、その最初の五字と最後の五字を抜き出せ。ただし、句読点も一字とする。

［　　　　　　　　　　］〜［　　　　　　　　　　］

【確認問題】

１　波線部ａ～ｄの本文中の意味として適当なものをそれぞれ次から選べ。

ａ　ア　立ち去りにくく

　　イ　そうなりにくく

　　ウ　断りがたく

　　エ　なにげなく

ｂ　ア　雲で空一面暗くなる

　　イ　悲しみに暮れる

　　ウ　日記を書いて過ごす

　　エ　紙を破り尽くす

ｃ　ア　以前　　イ　生きていた時

　　ウ　前世　　エ　あった時

ｄ　ア　壊す方法がなく

　　イ　与える相手がなく

　　ウ　気晴らしする人がなく

　　エ　どうしようもなく

２　二重傍線部１～３の助動詞の文法的意味として適当なものをそれぞれ次から選べ。

ア　受身　　イ　尊敬　　ウ　自発

エ　可能　　オ　完了　　カ　存続

１［　　　］　２［　　　］　３［　　　］

【補充問題】

３　点線部を助動詞の用法に注意して現代語訳せよ。

［　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　］

【解答】

問１　数ならぬ

問２　⑸

問３　⑵

問４　⑵

問５　⑤＝⑶　⑥＝⑷

問６　月のくまな～らさるる。（～くらさるる）

【確認問題】

１　ａ＝ウ　ｂ＝イ　ｃ＝ア　ｄ＝エ

２　１＝ア　２＝ウ　３＝カ

【補充問題】

３　決して思わなかったが

【現代語訳】

　若かったころから、我が身を役に立たない存在だと悟ってしまったので、ただ生きていたくもない命を長らえていることさえも煩わしい上に、まして他人に（私の存在を）知られようということは、決して思わなかったが、しかるべき（立派な）人々が、（私が）断りがたく（出仕するように）言って取り計らうことがあって、思いがけず、年月が経って後に、また禁裏の中を見た我が身の運命は、まったく無常で、自分の心の中もなんとなく落ち着かない。藤壺のあたりなどを見るにつけても、昔住み慣れたことばかりつい思い出されて悲しい上に、お部屋の装飾もあたりの様子も、変わったことがないのに、ただ私の心の中だけますます（思い）砕ける悲しさよ。月で曇りがない月をもの思いにふけって眺めて、思い出さないこともなく自然と悲しみに暮れる。昔身分が軽い殿上人などとして見た人々が、重々しい（身分の）上達部であるのも、「（もしあの資盛がいたなら）ああだったろうに、こうだったろうに」などとつい思い続けて、（再び出仕する）以前よりもいっそう、心の中はどうしようもなく悲しいことは、いったい何に似ているだろうか、いや、何にも似るはずがない。高倉院のご様子に、とてもよく似申し上げなさっている、後鳥羽天皇のご様子（を拝見する）につけても、ものの数ではない（私の）心の中だけで耐え難く、昔が恋しくて、月を見て、

　　　今はただ、（私が）無理して忘れている昔のことを、思い出せと（言うか

　　のように）澄みわたっている月の光であることだよ。